

時代は流れても 変わらない「弔うところ」を伝え続ける

創業140年を迎えたこの日に、改めて創業から現在に至るまでを顧みると、どの時代にも「弔うところ」を大切に、葬送文化に沿った正しい葬儀を追求し続ける」という姿があります。

140年のあゆみは、 葬送文化のあゆみでもある

創業以来、社名に 「葬具」の文字がある理由

弊社は、1877年(明治10年)、「葬具商 一柳商店」として名古屋市中区住吉町に誕生しています。創業者の一柳幾三郎はもとも宮大工で、腕の良さを見込まれ、葬具用品の製作を依頼されていたことが葬儀事業に携わるきっかけとなりました。その後、職人技を活かして寝棺、半寝棺、座棺の棺桶、葬儀に必要な道具、白木材の葬祭用品を、注文に応じて手早く一品一品丁寧にその都度作り上げていました。「葬具」の文字が屋号にある所以はそこにあり、独自の意匠を凝らした葬具を自社で製作し、それぞれの宗教、宗派に定められた葬儀式に従って的確な飾りつけを行うことを使命としていたのです。現在の社名に「葬具」の文字を入れているのは、「葬具の用途」を事業の本分とするという信念を貫き通しているからにはほかなりません。

のが主流で、会葬者は葬列を組み、それに付き添って移動してました。霊柩車は、それまでの葬送文化の一つでもあった葬列を否定し兼ねないという声もありましたが、その後の葬儀のあり方を変える大きな出来事になっていきました。

私の父である第3代社長・一柳幾三は、葬儀はどうあるべきかを深く考察し、現代につながる葬儀のスタイルを確立した人でした。例えば、身内で葬儀を行った後で、一般参列者が焼香する「告別式」を行う現在の葬儀の形式を考案しています。また、社葬が一般的ではなかった昭和初期に、葬儀委員長と親族の役割を明確にし、社葬の取り組み方を定めています。

第3代社長も含め、代々こだわり続けているのが祭壇づくりです。その姿勢に一切の妥協はなく、他社にはみられない祭壇を創造して奉仕するという使命を果たしてきました。私自身も独自の発想を活かした祭壇づくりに取り組んできました。現在、各宗教・宗派にかなった祭壇は200種類を超え、すべての葬儀にお応えできるようにしています。このように「葬具の用途」ということにはこだわりを持ち、その上でいつの時代も葬儀の本質をみつめ、革新するところは革新するという姿勢が、1世紀以上の長きにわたって支持されてきた理由ではないでしょうか。



住吉町時代の店舗(顔写真は一柳 幾三郎)

140年間、事業を 継続できた要因

弊社は常に葬儀の新しいカタチを追求してきました。

初代の跡を継いだ第2代社長・一柳 隨吉は、大正11年、米国製自動車「ビム号」を購入して改造し、この地区で初めて霊柩車を使用しています。当時、棺は人が担ぐか大八車で運ぶ



霊柩車(ビム号)

「弔いのところ」を 大切に、多様なニーズに対応

これまで蓄積した ノウハウを葬儀に活かす

私が引き継いだ頃から重要テーマとして取り組んでいるのが、葬儀品質の向上です。幸い、弊社は140年に及ぶ歴史があり、その中で有形無形の知識・ノウハウを蓄積してきました。そこでこれまでの経験をふまえ、各宗教・宗派の葬具、葬具の整え方、葬儀に対する心得、葬送儀礼、社葬、個人葬の流れなどをつぎに記録して「一柳の仕事」として社内共有し、品質の向上、標準化を目指しました。これをきっかけに全社的な品質向上への取り組みを開始し、平成11年、葬儀業界でいち早く「品質マネジメントシステム」の国際規格 ISO9001を認証取得しました。その後、PDCAの繰り返しによる継続的な改善活動を実施していく中で、全日本葬祭業協同組合連合会の「葬祭業安心度調査」にて「AAA」の最高評価を得ています。

ISO9001を認証取得しました。その後、PDCAの繰り返しによる継続的な改善活動を実施していく中で、全日本葬祭業協同組合連合会の「葬祭業安心度調査」にて「AAA」の最高評価を得ています。

近年、葬儀は多様化を極めていっています。それまでの人生にふさわしいお別れの方法を選びたいという人がいれば、地域の風習に沿った方法で、と考える人がいて、最近ではごく限られた身内だけの「家族葬」という人もいらっしやいます。それぞれに立場や考え方があり、それが正しいかは一概に言えるものではありません。

最期のお別れの場に ふさわしい葬儀のカタチ

規模ではなくそれぞれの価値観で「葬儀をやったよかた」と思えることが重要ではないでしょうか。故人を弔い、きちんとお別れができ、ご遺族の心が癒される、そんな葬儀でありたいものです。それに加え、遠方の親戚や故人の知人にも一声かけられることをお勧めしたいものです。遠方だから、時間を割いて会葬していただくのも、と遠慮される人もいらっしやいますが、参列するしないは、相手方の意思にお任せすればいいので故人と縁の深かった方に黙っているほうがかえって心の負担になってしまうのです。そんなことも踏まえながら葬儀の規模や内容を考えてみて

規模ではなくそれぞれの価値観で「葬儀をやったよかた」と思えることが重要ではないでしょうか。故人を弔い、きちんとお別れができ、ご遺族の心が癒される、そんな葬儀でありたいものです。それに加え、遠方の親戚や故人の知人にも一声かけられることをお勧めしたいものです。遠方だから、時間を割いて会葬していただくのも、と遠慮される人もいらっしやいますが、参列するしないは、相手方の意思にお任せすればいいので故人と縁の深かった方に黙っているほうがかえって心の負担になってしまうのです。そんなことも踏まえながら葬儀の規模や内容を考えてみて

はいかがでしょうか。

弊社では地域の皆さまに身近な斎場として、いちやなぎ野並斎場、いちやなぎ中央斎場を設けていますので、ご要望に合わせてご利用いただければと思います。



いちやなぎ中央斎場(一般式場)



いちやなぎ野並斎場(一般式場)

将来のことを考えた 葬儀とは

最近になって「葬式をしなくてもいい」という葬儀不要論なる意見が出てきています。果たして本当に必要のないのでしょうか。

例えば、日本では、春と秋にはお彼岸、夏にはお盆があり、先祖を敬い、故人を偲び、季節のものをお供えし、先祖に感謝し、お墓参りをし供養をします。いずれも日本人の美しい心を映す大切な行事です。ところが葬儀を軽視していると、弔う気持ちが薄れ、お墓参りなどで供養する習慣が次第になくなっていくのではないかと危惧しています。

何より葬儀は、故人を弔う儀式です。故人にとっては、今まで関係してきた方々へ知らせてもらい互いに別れを告げる場とすることによって、葬儀はたいへん合理的なものになります。ご遺族は故人をどう送り出すか、葬儀に対する姿勢をどう示すが重要になります。故人は一人で生きてきた訳ではありません。また遺されたご家族も各々一人で生きてきた訳ではなく、これからも周りの人を支え、支えられて生きて行きます。

遺族は今まで故人に関係してきた人々との絆を確認し、社会的に区切りをつけ、「弔うところ」で送り出すことが大切です。

葬儀を終えた後、遺族は故人が生前に関わってきた人とのつながりを新たに知り、そして故人を送り出したという充実感も覚えることでしょう。このような葬儀であるべきだと思います。

株式会社一柳葬具總本店 一柳 鏞
取締役社長



いちやなぎ中央斎場1階ロビー

創業140年を迎えることができました。

明治10年(1877年)10月31日「葬具商 一柳商店」として創業しました。

時代は移り、価値観が多様化し、それぞれに望まれる葬儀のあり方が異なってきました。どのような時代であっても、私たちは「弔うところ」を大切に、「一柳に任せてよかた」と、おっしゃっていただけるよう社員一同、一層の努力を尽くして参ります。



いちやなぎ野並斎場
名古屋市中区
野並三丁目538番1号
TEL(052)899-0111



いちやなぎ中央斎場
名古屋市中区
千種二丁目19番1号
TEL(052)745-1212

株式会社 一柳葬具總本店

■本社 〒460-0008 愛知県名古屋市中区栄三丁目14番11号 TEL:052-241-0658
■営業部 〒460-0012 愛知県名古屋市中区千代田一丁目7番11号TEL:052-251-9296
<http://www.ichinaganagi-sougu.co.jp/>